

鬼の角

泉鏡花作

第一章

「いや、どっこいしよ。そら／＼其處は凪だよ、
氣を着けな。やれ／＼吾の手こそ曳いてくれずとも、
老人に世話を焼かすといふがあるものか。お前を陪
從に連れて出ると氣が揉めてならないぞ。傍見ばつ
かりするもんだから、それ泥濘だ、それ溝だ、と一々
氣を着けてやらなければならぬ。其度毎に吾はも
うあぶ／＼する。壽命の毒だとは思ふけれど、旦那
殿が連れて行けと云ふものを、長松は世話が焼けて
不可と云つて見る。それまた旦那殿のお目玉だ。そ
れが不便と思へばこそ連れて出るやうなもの、ま
るで荷厄介で、始末に畢ない。いや、然うは言ふも
の、かう云ふ吾もお前の年紀には、矢張其通りで
あつた。は／＼、お前だつても宿へ下れば若旦那
だ。喃、長松。今夜は北風が吹いて寒いから、早く
歸つて暖まれ、さあ、その意で疾く行かう／＼。」

慈悲深き老人は小僧を従へて出先より今歸途に就けるなり。小僧は御隠居の深切なる注意を聞かむともせで、頻に四邊をニしつゝ、

「やあ／＼、面白いな。彼方でも此方でも、福者内福者内ツて遣つてますよ。御隠居様。」

「むゝ、今夜は節分だの。」

欲遊盛の小僧は大勢が鯨波の聲を揚げて豆を拾ふ賑しさの手に取る如く聞ゆるにぞ、

「あゝ！ 行つて見たいな、喰附いて、打倒して、引掻いて、匍匐になつて、掻込んで、袂に一杯拾ふけれども喃。」とニちがましく眩けり、老人は頬笑みて、

「吾は遊ばして遣りたいが、さういふ我儘をさしては店の者の範にならない、我慢しろ／＼。可いわ、其代吾が餛飩かけを奢つてやらう。」

「成るべくなら、御隠居様、えゝ、お汁粉にして戴きたうございます。」

言ひも訖らで渠は捷く前に廻りて、隠居の膝に叩頭せり。老人は噴出して、

「はゝゝゝ、一番附合つてやらうかの。」

「はい、是非、へい是非、是非へい、是非へい。」

小僧は（是非へい）を謳ひて躍れり。

「これさ、何だ。何處でもお前の可い處へ入んな。」

聞くや否や小僧は調子はづれの聲を揚げ、

「大願成就、や、忝い！」

ぎつくり見得をして矢庭に駈出す、其疾きこと鼯の如く、四五軒先の小松團子といへる名代の汁粉屋に飛込めり。

老人はこれを見て、

「罪の無い奴だ。」

と笑ひながら後より其汁粉屋の店頭に至れば、

「御隠居様、萬歳！」

と暖簾の蔭にて不意に喚く。老人は吃驚して、

「えゝ！驚いた。この小僧め。」

小僧は如才無く莞爾々々して、

「唯、入らつしやい！」

汁粉屋に入りて老人は手焙を引寄せつ、唯見れば
さすがに禮を知りて、小僧の遙下りて跪坐するをし
をらしく思ひ、

「さあずつと来い、此家へ来れば吾もお前も同一
身分のお客様だ。遠慮は無い。」

膝近く進ませつゝ、

「さあ／＼手を出して暖まるが可い。めつきり寒
いよ、喃。」

老人は火鉢の上に揉手をしながら、小僧の手の甲
を睨と視て、

「大分靴を切らしたな。おゝ、血が出て居る。嘸
疼痛だらうの。むゝ．．．．．」

其暖まりたる掌以て、柔に其靴を搔撫でたり。小
僧は祖父に於ける孫に齊き温言を聞く嬉さに、平生
奉公の艱苦を思出して胸迫り、差俯向きて鼻噉れり。

老人も鼻をかみしが急に氣を變へて故と打笑ひ、
「辛抱しろ／＼、何のこれしきが、べろりと嘗め
て置け、つい癒る。」

「慫慂しつゝ老人は仕舞懸けたる鼻拭の裁を以て、
「ふむと謂はつし。へん、嬰兒の様だな、あてこ
とも無い。」
時に老人の詭は來れり。皆これ小僧が注文せし處
のものなりき。

この佛心の老人は富有なる商家の樂隱居にて年紀既に六十の坂を越えたり。其家の身上悉皆を一代の内うちに造上げたるほどの老人なれば、今や全く世を棄て、聊家事に喙を容れざれども、もの云はざる天道のなほよく人を制する如く、おのづから一家を支配して帳簿に一點の誤なからしむ。然もあらゆる艱苦を経て今の境遇に來れる老人なれば、酸も甘きも噛分けておもひやりいと深く、人を憐むこと、古の仁者の風あり。恩威ならび行はれて敬愛さるゝこと一方ならず。さればなべての老人は若き者に邪魔にさるゝ習なれども、この隱居は決して然らず。其外に出づることあれば、留守の息子は謂ふも更なり、嫁をはじめとして、番頭、手代、下婢の輩皆お歸宅を待懸け居れり。

陪從なる小僧は汁粉屋を出で、幾度もお辭儀をなし、

「御隱居様難有う存じます。へい、何とも申され

ません甘いこつてございました。私わたくしはもうお汁粉しるこさへ喰たべられますれば、其上そのうへに何も出世しゅつせするには及およばぬといふ豫かねての覺悟かくごでございますよ。へい、盆ぼんの養やぶ父入いりの時から今日けふが日まで思おもひくすんで居をりましたんで、實じつは其夢そのゆめに見みます。え、大抵たいてい毎晩まいばんでさあ。何故なぜと申まをしますと、へい、御隱居ごいんきよさま様、養父入やぶいりの時戴ときいたきましたお小遣こづかひでもつて何なにより先さきお汁粉しるこをと存ぞんじましたつけが、まあそれは後々あとくのお樂たのしみ、一番ばん好いいものが眞打しんうちといふので、先まづ前座ぜんざの鹽煎餅しほせんべい一錢せんが取とつ着つきで、喉のどの乾かわいた處ところへ氷三杯こぼり。其それから大福だいふくへ喰くつて懸かり、こいつを五ツとやつて歩ある行なき乍ながら豌豆豆まめ、二錢せん。午飯おひるを天井てんどんで茶漬ちやつづて、一幕立見まくたちみとやつて、それから見世物みせものを三ツ見みて、歸かへりに蕎麥そばを二ツ。それからほつつきまして鮓すしを食たべて、徐々そろ／＼暮合くれあひでございますからお家うちへ歸かへりがけに唯今たゞいまの汁粉屋しるこやの前まへで、さあこれからだと先まづどきつく胸むねを落着おちつけまして、五杯はいは確たしかに食たべるつもりで、蝦蟆口がまぐちを開あけて見みますと、何どうでございませう。御隱居ごいんきよさま様、あ、今思出いまおもひだしても涙なみだが出でます。へい、もうすつかり使つかつちまつて、五厘りん一ツと鑢びた二文もんしかないだらうぢやございませんか。私わたくしはもう／＼落膽がっかりして、其そのまゝ其處そこへ打倒ぶったふれて

寝てしまひたくなりました。それですもの、お汁粉
といつちやあ命から二番目で、いまにおのれ年紀が
いつたら小倉、鹽飴、御膳、田舎、お汁粉ならば何
でもござれ、十二月を食倒してやりたいばつかり
に御奉公を大切にいたします。あゝ、旨かつた。何
うも／＼難有うございました。御隠居様。」

老人は唯呆るゝばかり苦笑して聞きたりき。小僧
はまた言を繼ぎ、少しく聲を密めつゝ、

「旦那様の御陪従をいたしますと、劍突ばかりお
食はせなすつて、お汁粉どころぢやございません。
それに番頭さんなんと来た日にや、そりや何うも酷
うございますよ。私がつい坐睡をいたしますと、彼
奴！ またお汁粉の夢を見て居ようから、流汁を掬
つて来て嘗めさせる、なんて千どんに云ふんですも
の、邪慳ぢやアありませんか。鞍が切れて痛いとい
へば冷えて疼むのだから焼けば癒る。焼火箸を突込
めなんて、それは／＼恐しうございます。お奥のお
三どんは掃除をする時そつと御隠居様のおとりなす
つた爪を拾つてしまつといて、毎朝お茶の中へ一片

づゝ入れて煎じますつてね。これを三度／＼皆に飲ませたら、些少あ御隠居様に類似るだらうといふんださうです。」と眞面目に謂ふ。

「いやはや、大變だ。そんなものを飲せるかえ？

薄汚え。」

老人はます／＼呆れぬ。

「なに汚いことがありますものか。犀角といふ薬は獸の角ださうですね。それから見りや御隠居様の爪の垢はよつぽど難有い。」

「悪く胡摩を磨るな。まだお汁粉が喰足りないのであらう。」

恚語りつゝ行く間に、とある庫の前に出でたり。時に往來は淋しくなれり。小僧も饒舌り草臥けむ、しばらく無言になりて、其庫の角を左に曲り、其家の前に出でたるに、またもやさゞめく追儼の聲せり。

「おや、御隠居様やつてますぜ。」小僧は立停

まりてまた動かず。老人は持餘し、

「そら、お汁粉しるこか。困こまつたものだ。」と呺しづやくと
たん、格子戸かうしどの内に豆まめを撒まく音おとばら／＼と礫つぶての如ごとく、
「鬼者外おにはそと！」

叫さけぶや否いなや、身みの丈たけ六尺しやくに餘あまりぬべき大漢おほまのこの異形いぎやう
なるが赤裸あかはだかのまゝ横よこざまに轉まるび出いでゝ、婀呀あなやと避さく
る隙ひまもなく、ドンと小僧こぞうに抵觸つきあたれり。

小僧の仰様に轉ぶと與に、異形の者は消失せたり。

老人は咄嗟の間に演ぜられたる一場の怪事に氣を奪はれ、きよろ／＼四邊を見廻しけるに、何かは知らず落ちたるものあり。瞳を据ゑて熟く見れば、星明に輝きて、其もの金色の光を帶べり。

手なる杖以て突試みるに、コトコトといふ響ありて、堅牢なること石の如し。一定怪物が落せしものと、老人は不氣味ながら、そと手をのべて拾ひつゝ、掌に載せて透し見れば、其長さ八寸ばかり、根は太くして先は尖れり。まはり三寸に餘りたる形獸の角に肖て、質は金屬に異ならざるが但少しく暖味あり。何様異様の珍物なれば、隱居は其まゝ懷中し、ほと呼吸をつきて、胸を撫でぬ。

數杵の鐘聲陰に籠りて此時萬籟寂然たり。折から老人のイむあたりへ朦朧として顯れたる一個の丈高き赤鬼あり。此の寒さにもかゝはらず虎の皮の禪襠

ならでは一絲懸けざる赤裸の手足は一面に朱を以て
刷けるが如し。渠は遺失せしものを覓むる如く、蚤
取眼を四方に配りて、うそ／＼地上を漁りつゝ、や
がて老人の間近に來りぬ。

誰かこれを見て驚かざらむ、少なくとも氣絶すべ
きに、蟲も殺さぬ老人の意外にも恐るゝ色無く、屹
と睨附けて突立てり。

鬼は人ありと見て、前に進み、

「これ、人間殿、些ものが問ひたうござる。」
謂出でたる聲は破鐘の如くなれども、言は慇懃なる
ものなりき。

斯る時には「あい／＼何か用かえ。」と常に
は優しき老人なるが、いかにしけむ此時は、昂然と
して肩を上げ、

「何だ！ 聞きたいとは何事だ。」 意氣既に鬼
神を呑めり。赤鬼は腰を低くし、

「えゝ、外のこつてもござりませぬが、何ぞ此邊
に落ちて居たものをお見懸けなさりはしませなんだ

か。
」

老人は己が懐中せる珍物の持主の、それかあらぬかを確かめて、いよ／＼其獲品の眞價を知らむと、さあらぬ體に空惚けつ。

「はゝあ、いや別にこれといふものも見なんだが、して汝の落したものは一體何だ。」

「其は・・・」と赤鬼は其天窓を撫で、

「ちつとも手懸がござりませぬので、はやもう途方に暮れまする。」

渠は力無き様なりき。

「はて其無くしたものは何だといふに。」

「へい／＼。」と唯天窓を搔く。

主客の勢趣を變へて、老人は却りて尋問する位置に立ち、

「へいでは分らぬ。いやさ、何を遺失たといふに分らぬ奴だな！」

「角、……角を落しました。」と鬼は遂に打明しぬ。

「何だ！ 角を遺失た。間拔だな。何うしてまたそんな麁匆をやつたのだ。」

「え、此處の角屋敷で豆鐵砲を喰ひまして、慌てゝ遁出します拍子に、何でも此のあたりで何かに抵觸つて轉覆つたと存じましたが、眞闇三寶に駈出して、道で氣が着くと大事な角がなくなりまして。此處いらに相違ないのでございますが、何とお見懸けなさりませぬか。」

老人はいよ／＼其に極りたりと心密に喜びながら、
「む、而して其は金々と光つて居ような。」

こは手懸の出來たるぞと、鬼は大きに力を得つ。
「おつしやる通り金色の光があるのでござります。」

「いやに箔なんぞを置いてびか／＼さした處なんぎ、擬物らしいが、何うだ。黄金の角なんてつひぞ

畫ゑに描かいたこともない。」

「滅相めつさうな人間にんげんになにが分わかるもんで。鬼夥間おになかまでも黄わう金の角こんづつとなると、づつと位ゐが可いいのでさあ。」

「ふむ、して見ると銀ぎんのもあるな。」

「青あをいのもござります。青あをいのが黒くろくなります。」

それから銀ぎんになつて、それからでなければ黄きん金色いろにはなりません。」

「いかさまな。」とほく／＼頷うなづく老人らうじんは、遺失おとしぬ

主しの確たしかに渠かれなることを信しんじて今更いまさらに頷うなづくにはあらず。

其懷中そのくわいちゆうせる靈物れいぶつの一段貴重だんきちやうなるものなることを了れうせしなりき。

四

幽冥肉眼の得て物色ふべからざる惡鬼の世に出で
たるは既に奇なり。其鬼の處女の如きも亦奇なり。
然れども優愛彼の如き老人が一朝梟慾無慈悲の小人
となれることの更に奇なるには如かざるなり。讀者
は渠が鬼の角を拾ひて、これを我が所有としたりし
を忘れざるべし。

鬼は老人の口振に因りて少なくとも角の所在を知
れるを信じ、早くこれを取返さむと、ます／＼己を
謙れり。

「え、何卒御手にございますならお返し下さい
まし、それとも在る處を御存じならお教へ下さる様
に願ひます。」

「そんなものは知らないね。」と老人は横を向
きぬ。

餘り意外なる返答に鬼はこれを眞とせぎりき。

「御串戯おつしやりますな。」

「知らないよ。」

「もし、串戯ではござりません。」

「はい、串戯ではござりません。」

「こりや驚いた。」 鬼は老人を瞻りぬ。老人は

空嘯き、

「此方も驚く。知りもしないものを、汝飛んだ言

懸をしやあがる。」

と逆捻を啖はしたり。

「唯知らないぢやあ分りません。」

「否、知らないから分りません。」

無法極まる言分に赤鬼は赫となり、煙の如き呼吸を吐き、眼を噴らし、牙を噛み、搦懸らむず氣勢なりしが、忽ち夜叉の相好崩れて、

「汝！ 憎い因業親仁、唯口と思ふあとから、何だか無暗に不便になつて、爪もあてられねえ。はて、面妖な。何うしたのだ。えゝ、堪らなく気が弱くなつたぞ。むゝ、口惜い。」 と悄乎して自から其心

を怪む如し。此方は彌増しに強くなりて、

「むゝ口惜くば喰ひ着け。年こそよつたれ、腕は

確か、さあ来い。」

と鬼にも組まむず元氣なり。鬼はます／＼悄氣返り、

「何うも／＼我慢にも力が出せねえ。はて、左様な因業をおつしやらずに、戻して下され、後生でござる。」と老人の袂に縋れば、「えゝ、つくなく／＼」と振拂はれ、なほ懲ずまに取絶るを、老人はあられなくも肱に懸けて突飛ばせば、鬼はたじ／＼と蹠跟きて、思はず小僧に躓きたるが、活の法にや協ひけむ。先前より其處に打倒れて、呼吸絶えたりし長松は、うむと一聲蘇生り、死なざりし以前怪物に抵觸られし時の驚駭をこゝにいひ顯さむとなすかの如く、わつと叫びて飛起きしが、唯見れば凄まじき赤鬼の己が傍に立てるにぞ、更に婀呀と絶叫して、隠居の腰にしがみ着き、「お助け／＼。」と齒の根も合はず。

然るに小僧が豫て經驗上佛と信じて、鬼の手より救はれなむと、頼の綱を投懸けたる、隠居の心は鬼

なりき。

「えゝ！ 煩惱な、此小僧め。」

其横面を張飛ばせば小僧は痛さに目眩めきてまたもや大地に伏轉び、あ痛あ痛と呻く處を土足に懸けて蹴飛ばされ、小僧は咽喉も裂けむずばかりに足手を悶えて號泣せり。鬼は慌てゝ抱上げ、

「おゝ、可哀相に泣くな／＼。」

其背を撫でゝ労りつゝ、老人の強慾なる、いかに哀願すればとても、角を返さむ氣色の無きに、今ほはや斷念けむ、怨めしげなる顔色にて老人を瞻りつゝ、

「汝人非人、末はいゝことがあるまいから、左様思へ！ さアらばだア。」

最物凄き音調以て、謂ふかと思れば姿は無し、吹消す如く失せたりき。

蝉の鳶に攫はれたる、其時の心地いかんと我身に

知るは小僧なるべし。渠は隱居に蹴飛ばされて、剩
へ鬼の手に捉へられつ。痛さ、悲しさ、恐しさに、
聲も得立てゞ足掻くうち、其身は紙鳶に化したる如
く蹈堪ふべき足懸もなく、ふは／＼と宙を差して、
行方も分かず舞揚り、下界遙かになりけるにぞ、後
の危難はともかくも、今落されては微塵にならむと、
鬼の腰にしつかと縋り、後は野となれ山となれ、眼
を瞑りつゝ行くほどに、海越え、山越え、谷越えて、
鬼は其棲家なる怪雲洞にぞ着きにける。

五

「毘舎闍、今戻つた。おい、開けてくれ。」
外おもてに立たちて音信おとづるゝは、角つのを遺失おとせし赤鬼あかおににて、
渠かれが名なは鳩槃茶くはんだといふ。毘舎闍びしゃじやといふは妻つまの名ななり。

「應おう。」 答こたふる聲こゑは毘舎闍びしゃじやなるべし。婦人をんなに似に
げなき裸體らたいにて、腰こしに豹へうの皮かはを纏まとへるが、鐵くろがねの門もんを
引開ひきあけつゝ、

「おゝ、旦那殿だんなどのお歸かへりか。」
紙燭しそくを照てらして出迎でむかへぬ。

「つい用ようがあつて、手間てま取とつて、存ぞんじの外ほか遅おそくな
つた。眠ねむかつたらうに堪忍かんにんしな。」

恚かく謂いひつゝ鳩槃茶くはんだは、小僧こぞう長松ちやうまつを背うしろ後に庇かばひて、
毘舎闍びしゃじやの後あとより門もんに入いれり。女鬼めおには不圖ふと立停たちどまりて、
頻しきじに鼻はなをひこつかせ、

「あれ何なんだか人臭ひとくさい、はてなあ、お前まへは何どうだ
え？」

持もてる紙燭しそくを振照ふりてらして、彼方あなた此方こなたを見廻みまはせり。鳩くは

槃茶は素知らぬ顔にて、

「そりや主が氣の故だ。閻魔の廳から先觸も來ねえのに、今時誰が來るものだ。」とさあらぬ状に紛らせども、毘舍闍は更に肯入れず、

「いゝやよ、確に人臭い。しかも生々しい匂だによ。こりや何うも男の兒だ。」

小僧は此聲を聞くと齊しく、ぶる／＼と震上り、口の裡にて、

「南無お地藏様々々。」

星を指したる毘舍闍の言に、今は隠すも詮なしと、鳩槃茶は打明かして、小僧を連歸りたることのみを語り、己が角を失ひしことは、さすがに恥ぢて謂ひも出でず、唯其小僧を己が家に養ひ置く旨を告げぬ。其食ふべからざるよしを聞きて、毘舍闍はさも本意な氣に、

「お土産かと思つたら食客かい。物氣の高いに迷惑なれど、今夜は常に無くお前様が、（眠かつたらうに氣の毒だ。）なんて、優しくいつておくれだから、あい、私も謂ふこと聞きませう。これそこ

な小僧さん、大事な此方へ入りや。」

先づ生命には別條無しと、小僧は俄に元氣づき、

ちよこ／＼と走り出で、毘舍闍の前に叩頭し、

「へい、御新造さん今晚は。はじめましてお目に

懸りまする。へい、つい御勝手を心得ませんもんで

すから、失禮をいたしました。」

愛嬌よく挨拶すれば、

「飛んだ氣輕な小僧だの。」と夫婦齊しく打笑

ひ、其まゝ内に伴ひたり。

鳩槃茶どつかと胡坐を搔き、

「あゝ！滅法界草臥れた。さてと留守に何もか

はりは無しか。而して誰も來なかつたか。」

「先刻閻魔様からお使でね。明日は新入が一人あ

るから其目算で居ると、報知て來ました。こりや美

しい婦人ださうだが、嫉妬で狂死をしたんだとさ。

例に因つて若い者が、表の庭で、今夜夜通火を熾し

て、來たら直ぐ火責にしようといふので、折角支度をして居るが、お前まあゆつくりと休むが可い。」

小僧は片隅に踞まりて、奇異の思をなしたりき。

男鬼は聞きつゝ打頷き、

「あゝ、さうだつたか。これ一寸其帳面を取つてくれ。」

毘舍闍をして、木の皮もて表紙としたる一冊の帳簿を取出さしめ、人間の爪或は胸より燃ゆる火焰に照して、繰廣げつゝ、打視め、

「むゝ、こゝに在る、これだな。年紀は艶といふか。家附の娘で養子をする事、十六の年紀から今に到るまで五十一人、非道い奴だ。皆嫉妬のために家内折合はずして、不縁となる。終の婿何某も居堪らで遁出だす。これは増花の出来たる故と、思僻めて、嫉さ嫉さが嵩ずるより、狂氣となりて往生するものなり。いかさま、これは恐しい。」

と怪雲洞の主は舌を巻きて三歎せり。豫てお饒舌

の長松は人を擇ばで談話したき性なるゆゑ、先刻よ
り口はむず／＼すれども、對手の氣心の知れざるた
め、話柄を見出すに困みて、不得止黙したるが、洩
聞く帳簿中の艶なる婦人は、小僧が心當の者なりし
かば、得たり賢しと差出で、

「旦那、そりや破損町の者でせう。え、え、左様
でございますか。そりや知つてます。其處の老人は
内の御隠居様と暮朋達ですから、よくお随伴で参り
ますが、彼處の御新さんと來た日にや名代の嫉妬家
で、何しろ門口へ入りますともう芬と匂ひます。」

「ふむそんなことも書いてある。」 鳩槃茶は毘
舍闇を顧み、笑を含みて戯れたり。

「些たしなむが可いぜ。」

毘しゃじや
毘舎闍の未だものいはざるに洒落者の小僧は圖に
乗の
り、

「へへへ、御新姐さんもそれですか。道理で腥い
匂がする。其癖人のことを人臭いとおっしゃつたが、
譬にいふ臭いもの身知らずですな。」

毘しゃじや
毘舎闍は眉を昂げて、

「この小僧、天窓から鹽を着けるぞ。」

威されて小僧は蒼くなり、

「おつと、黙らう。此口は不可い餓鬼だ。」と
自分の唇をぷつりと抓りて、また片隅に引退れり。

毘しゃじや
毘舎闍は小僧を流眊に懸けて、良人を見る眼に怒を
含み、

「お前、何だつて氣の悪いことを謂ふえ。」

「なに串戯だ、串戯だ。仲直に一杯遣らう。」

妻は早くも意解けて、異議無く酒肴を安排せり。

鳩槃茶は、髑髏盃に猪の生血を酌がせながら、雪なす色の肉あるを視て、其眉を顰めたり。

「この肴ぢやあ飲めねえな。」

「おや、妙なことをお謂ひだ。こりや十八の婦人の肉だ。脂肪が乗つてるから甘味よ。お前、何より好物だらうぢや無いか。」

鳩槃茶は身震して、

「おゝ、嫌なことかな。己あもう何だかこんな品は薩張氣がねえぜ。餘り酷たらしいからの。かう、切たてだと見えて、まだびく／＼動いてるやうぢや無いか、氣味の悪い。」

と鬱込む、毘舍闍は太くこれを怪み、

「まあ何うしたといふのだね。をかしな鬼だよ。」

お前さん今日に限つて何うかやしなないかい。」

鳩槃茶は首を低れつ。

「何うも斯うも無えはな。まあ／＼二三日精進だと思つてくれ。見たばかりでも胸に支へる。えゝ、而して此酒も弱つた、まだの濁酒の方にしよう。あ

のさ、牛の涎を出しな。」 弱々しき良人の言種、
平時とは打つて變りて、恰も別人の如くなるにぞ、
毘舍闍は疑の眼をニりて、渠が顔を右瞻左瞻、

「あれ、妙なものをお前被つて居るね。そりや何
だえ。」 鳩槃茶は角なき天窓を秘さむため、道に
て工夫し來りたる、被物に眼を着けられ、南無三と
少しく狼狽へ、

「これかえ、こりや何だ、娑婆で毛僧帽子といふ
ものだ。おつりきなものよなう。路で雨が降出した
から、一寸取つて來たのさ。」

「そんなものは脱いでおしまひ。憚りながら怪雲
洞に雨は漏りやしないから。」

これを脱ぎては直ちに露顯と、鳩槃茶は天窓を抑

へ、

「暖かくつて可い心持だ、脱ぐが最後風邪をひく、
大眼に見てくれ。」

「何だい、まあ不景氣な、而してそりや坊主の被るもんぢや無いか、えゝ、見たくでもない、嫌なこつた。」

「そんなことをいふけれど、嫁いびりの鬼婆が天窓を見ると坊主なのがある。寒凌ぎだから可いでは無いか。早く濁酒を爛してくれろ。熱いのを引かけよう。」

「お肴は何にしようね。」と爛をしながら毘舎閻は問へり。鳩槃茶は打案じ、

「菜ツ葉に油揚、ひじきに青豆といふ處はあるまいか。」

毘舎閻は餘のことに噴出したり。

「何うかしてるよ、此鬼は。異國の食物を食はうなんて。」

「むゝ、さうだつけの。なに、なければ総菜で可い。さあ酌いで下つし。」

「ぐつとやつて、元氣をお着けな。何だか餘り不

景氣だ。」

牛の涎の酌をする。

「おとゝある／＼。己に構はず、お前可いものを喰はつしよ。」

「喰べなくてさ。もう、堪らない、これを見ちやあ。」

毘舍闍は若婦人を料理しつといふなる、件の白き肉のなほ體温を存したるが、鮮血の垂るを喰缺きつゝ、膽を潰せる小僧の顔を微笑みながら見返りぬ。

「小僧さん、お前何かくはねえか。」

謂はれて小僧は苦笑して、

「へい、實は先刻から腹が空いて、咽喉がぐび／＼謂つてますが、婦人の肉だなんて、何うも共食は恐れますなあ。」

「むゝ、ぢやこれにしる。」 鳩槃茶は他に一皿の食物を與へたり。小僧は恐々差覗き、

「變に青臭うございますな。こりや何といふ野菜

ですね。へい、妙めうに匂にほひますな。」

「そりや蛇へびの雷かみなり干ほしだ。」

小僧は「えゝ！」と摺下り、顔色變へて驚きたり。鳩槃茶はこれを見て、

「種々な食好をする贅澤な奴さんだ。雷干が食べられなけりや、これを遣るから食つて見な。」と食懸けたる吸物椀を、小僧の前に押遣りつ。小僧は遠くより打視め、

「蜥蜴ぢやありませんかね、せめて赤蛙か蝸牛なら何うにかやつてお目に懸けますが、蛇の雷干なんざ、聞いても恐れますよ。へい、折角下さるものをお辭儀しちやあ却つて失禮にあたりませうが、實は蟲だけは御免蒙りたうございます。」
 「そりや、蟲ぢや無い、幽靈さ。」

平然として語る毘舍闍の言に、小僧はます／＼逡巡して、疾には答も出でざりき。小僧の太く因循なるに氣疾の毘舍闍は苛立てり。

「えゝじれつてえ！ 折角私の遣るものを愚圖々々、

して食はないと、汝の方を食つちまふぞ！」

「ひえゝ、食ひます。戴きますよ。何うも大變なことに成つて来たなあ。何で死んだ幽霊でせう。傳染病ぢやございますまいか。」と小僧は既に泣聲なり。鳩槃茶は腹を抱へて、

「何かと思へば譯もないことを謂ふ奴だ。人の死んだのぢや無い、幽霊といふのは五位鷲の吸物だ。」

「五位鷲ですとえ。ぢやあまあ人間に御縁があります。へい戴きませう。」

小僧はやう／＼人心地せり。

「何うだそれならば食はれよう。まだ亡者と稱へて海豚の刺身もある。」

小僧は正體を聞きて心を安んじ、空腹のことなれば、(亡者)と(幽霊)を多量に食し、飽けば乃ち眠氣ざしつ。朝來主人のために散々に使はれし疲勞もあり、殊に角屋敷の戸口にて異形の怪物に抵觸られしを始めとして、心を激すること度に過ぎたれば、前後を忘れて坐睡を始め、果はころりと肱枕して、ついぐつすりと熟寐せり。

恚かくて幾時いくときを経へたりけむ、小僧こそうの夢ゆめを破やぶりし時は、
鬼おにの夫婦ふうふは傍かたへにあらで、酒肴しゅかうの調度てうども片付かたづきたりき。

小僧こそうは主家しゆかにありし時の朝あさとは違ちがひ、強しひて起おこされしにあらざれば、眼めは分明はつきりと開あきたれども、心こころは
半なかば夢路ゆめぢを辿たどれり。

「先まづ生命いのちには別條べつてう無しと、こゝで落着おちついて相談さうだん
をせねば可いかんよ。喃長松ななちやうまつ。」

「へい。」と自みづから小聲こしゑに答こたへつゝ、首くびを縮すくめ
て舌したを吐はき、

「何なんだ馬鹿ばか々々しい。えゝと、あゝして、あゝや
つて、お汁粉しるこを喰たべたと、それは先まづ可よしで、それ
からあゝなると、あゝなつて、而なして、あゝして、
それが濟すむと宙ちゆうへふわり。……待まてよ、此處こゝ
らから怪あやしいんだ。(夢ゆめに夢ゆめを見た夢ゆめを見る)
ことがあるもんだつて番頭ばんとうさんが謂いつたつけが、お
らあ、幾いくつめの夢ゆめだらう。(夢ゆめに夢ゆめを見た夢ゆめを見
るか) さあ、分わからない。(夢ゆめに夢ゆめを見た
夢ゆめ……) えゝ、つまらない。こんな六むづかし

いこと考へてると、眠くなつて、また夢だ。さう／＼夢ばかり見て居ちやあ目が覺めない。何でも可いとして、こゝは何處だらう。妙に薄暗い變な家だ。」

なほ頻りに圓なる眼をきよろつかせ、

「おつと、妙不思議、奇代、素敵と面白いことがある。彼處の棚に乗つてるなあ、昨夜雄の方の鬼が開けて見て、「お焼の御新さん」の何時何日に往生するといふことを檢べた帳面だぜ。待て／＼、一つ見て遣らう。玉乗も見たいものだが、あれと、大社の縁結の帳面ほど見たいものはないよ。」

と無遠慮なる長松も極めて秘密なるものならむと思ふにぞ。聲音を盗みて恐る／＼彼の帳簿を取下し、手疾く開きて一眼見しが、俄に失望の聲を揚げたり。

「あゝ！ 情ない。こりや弱つたな。ちつとも讀めない。皆が（手習をしる／＼）といふのを、（へん屁ならば放る、）なんてつて馬鹿にしたが、あゝ！ 悪かつた。こゝで字が讀めようもんなら、番頭佐兵衛今日頓死とやつてころりとさせてや

らうものを。口惜いな。待てよ、一寸、天神様にお
汁粉を禁つて見ようか知らむ。」

小僧は一字も讀めざれども、またと得難き寶なれ
ば、未練起りて棄てもならず。はじめより終りまで
一一葉々々丁寧に繰返し、穴のあくまで視詰めつゝ、
うつかりとする耳を貫き、

「きやつ！」と叫べる婦人の聲せり。

小僧は思はず飛上りて、

「ほう、吃驚した。見つけられると天窓から鹽だ
らう。」と舊の處に帳簿を納めつ。耳を澄ませば
婦人の悲鳴頻に聞ゆ。

小僧は婦人の泣聲を慕ひ行きて、とある板圍の隙
 間より、其外の方を覗きけるに、其處は樹も無く、
 草も無き、一面の砂原なるが、中央に六尺四面ばか
 りの大なる穴を穿ちて、これを爐となし、炭を山の
 如くに積上げて、焰々と火を起し、牛頭馬頭の鬼大
 團扇を以てはた／＼と煽立てつ。上座とも見ゆる處
 に、一脚の鐵榻を排して、鳩槃茶は其妻の毘舍闍と
 もに在り。

此方に瘤ほどの小さい角ありて、犬の皮の禪襦し
 たる、劣等の鬼兩個あり。左右より無手と一個の妖
 艶なる婦人の手を扼りて、荒らかに引立てなむとす。

悲鳴を上ぐるは此婦人なり。既に奪衣婆の手に剥
 取られぬと覺しくて、腰のみ布もて蔽へるが、丈な
 す黒髮蓬の如くはら／＼と亂懸れる間より仄に洩るゝ
 顔は物凄きまで蒼ざめたり。渠が全身の雪は今や烈
 火の上に置かるゝならむ、かよわき腕に力を籠め足
 を以て地を蹴りつゝ其まゝ土に根を下して、一步も

動かじとぞ悶ゆるなる、其容貌の誰なるかを、戦きながら小僧は視たり。果せるかな、これ昨夜風説されし處の妬婦なりき。

小僧は呼吸を密めつゝ、一種殘虐なる演戲を見物せり。効なき婦人の力にていかばかり抵抗すると、いかなぞ渠等に敵すべき。苦もなく宙に引立てられ、將に火坑に投ぜられむとしたりし時、突然、鳩槃茶は手を擧げて、兩個の鬼を制し留め、

「待て、待て。」

「待てとは？」 獄卒は怪めり。鳩槃茶は弱々し

く、

「餘り可哀相だ。塵芥ではあるまいし。生身の間を火責にするなんて、そんな非道なことがあるものか。まあ休にしろ／＼。」

元來ものゝ憐愍を知る側隱の情なるものは、直立動物を形造る分子のうちにあるものなれば、いかに殘忍なるものといへども、衷心一點の慈悲無きはあらざるべきも、渠等鬼の社會には寸毫もさせる傾の

なきものなれば、殆ど豫想到も及ばざる鳩槃茶の言を聞きて、雌鬼毘舍闍は謂ふに及ばず、一同呆れし状なりき。

鳩槃茶は渠等に向ひて、憐愍深き老人の口氣を帶び、

「何うぞ堪忍して遣つてくれ、己あもう何ういふものか、いぢらしくて堪へられねえ。」

「いぢらしいた何のこつたい。」と毘舍闍は堪り兼ねて呻出せり。

「先刻から聞いてりや、イヤ哀だの不便だのお前そりや佛の方で謂ふこつた。馬鹿々々しい！」

「さうでないことさ。佛だつてあながち嘘ばかり謂ふでもない。偶にや感心なことともいふわな。」
と生暖きいひぶりなり。

「だつてお前、それにした處で此婦人は悪性者で、澤山男を玩弄にした淫婦だといふぢやあないか。」

「姉御左様だとも。」鬼等は聲を揃へて謂ふ。

鳩槃茶は首を掉り、

「うんにや、普通の人間より罪障の深い女人はなほ不便だ。罪を造つた奴と思へばおらあ可哀相で涙が出る。」と眞實の涙を流す、毘舍闍は癩癩が牙を噛み、

「此鬼や串戯ぢやないぜ。お前、閻魔様からいひつかつて、地獄から出張して、最寄の亡者は此方で處分をしようといふ、怪雲洞の主人ぢやないか。そんなことを謂つて濟むと思ふかい、贅六め。」

鳩槃茶は投首して、

「何と謂はれたつて仕方が無い！ 一層極樂へ宿替をしようか知らむ。」

「姉御、親方は氣が違つたんだ。」

「而して見や、變なものを被つてらあ。」

鬼等は叫べり。

毘舍闍は氣着きぬ。

「うむ、さう謂へば、昨夜歸つたまんまで、まだ脱がねえ。何でもこれを被つて來てから、しみつたれなことがばつかしいふが、こりや一番穿鑿ものだよ。おい、其頭巾を取つて見せな！」

「えゝ！」

と鳩槃茶は顔色變へて、毘舍闍の取る手を遮りぬ。

「おや！ いよゝ怪いぞ。皆な一寸手を貸し

な。

「合點だい！」

「それ無暗にひんめくれ。」

ばら／＼と立懸れば、こは堪らじと搔潛る、毛僧帽子を抜取られて、鳩槃茶はニと坐し、

「いや早、面目次第も無い。」と天窓を抱へて踞まる。

其角の無き坊主頭に、左右を圍める鬼等は、顔見合せて茫然たりき。

「あれ！ あれ！ 酷いことを遊ばすよ。あれえ！
誰ぞ来て下さいまし。」

と泣聲を揚げて救を呼ぶに、女隠居の慌しく駆け行く一室には、彼の鬼の角を拾ひし老人、肌脱になりて嫁の胸倉を取つて伏せ、片手に持てる盃の酒を其口に注がむとして、薬を幼児に飲ます時の如き大騒をなしつゝありけり。

女隠居は大に驚き、

「酒狂にも事を缺いて、お爺様何をなさる。」

と餘りの所業に腹立たしく、勃氣になりて極附けたり。老人は血走りたる眼を刮きてぎろりと睨み、

「婆々の出て来る幕では無い。引込んでろ！」

「いゝえ、引込んでやあ居られません。何處の何處にかお前さん、若い婦人を掴まへて酒を口中へ注入れるなんて、狂氣染みた眞似をするものがあります。お對手が無くて淋しければ、悴なり、私なり、いくらもお對手をしようでは無いか。ほんに／＼

「本氣の沙汰とは思はれません。」

「疊を叩きて詰寄りぬ。老人は取つても附けず、己のしたいことを己がするに、誰に遠慮が要るもんだ。何も酒の對手をさせようといふのでない、世話を焼かずと引退れ。ちと思はくのあることだ。」

「其思はく聞きませう。」と老婆は開き直りて、
「お前様嫁どのは九月の病人だよ。手荒いことをして、もしひよつと仕損があつたら何うなさる。ちやつと其處をお退きなさい。」と老人を押退くれば、嫁は這々擦抜けて、泣きながら遁出したり。老人は突立ちて、
「やい、待て！ 用がある。おのれ、舅のふことを肯ないか。」

追懸くるを懸隔て、争ふ老婆を突飛ばし、血相變へて躍出づるを、

「まあ、下に居て下さい、これ父様。」

此時馳來れる若主人は戸口にて其父なる老人を抑

留し、辛うじて座に就かしめ、

「もし、何うしたものでございます。母様こりやまあ何うしたことで。」

と老婆の方を顧みたり。老婆は此方に向直り、

「おゝ、悴か、良い處へ来てくれた。」と其一條を語るを聞きて、若主人は眉を顰め、

「驚きますな、飛んだことをなさいます。」

「飛ぶも飛ばぬもお前掴まへ處のある所業ぢやないわね。」

「さればですな。病人の嫁を捕まへて、押伏せて、咽口割つて酒なんざ、お話になりません。」

二人の頻に非難するを、空耳走らせて聞かざる状を装へる老人は、此時不意に一喝せり。

「黙れ！ 黙れ！ 汝がそんなことをしやべる口

も原は己が拵へて遣つたのだ。己といふものが、もしさ、此己といふものが居らなかつたと假に思つて見る。汝といふものが此世へ出よう筈のない理屈だ。喃、可しか、己に汝がなかつたものとして見れば、

嫁も何もあるもんぢやあ無い。身體を拵へて貰つた
禮として、彼の嫁を己に呉れる。何と異存はあるま
いな。」

「彼の父様が何をおつしやるやら、とかく御酒の
上でございませう、はゝゝゝ。」と若主人は笑に
紛らす。然るに老人は生眞面目なり。

「おのれ！ 酒の上だなんぞと、悪く己を嘲弄し
やあがる、串戯では決して無いぞ。」

「而してまた悴の嫁を何になさる。」老媪は傍
より問へり。

「うむ、何にしようと、彼にしようと、貰つた上
は己の勝手だ。」

「いえさ。」と老婆は推返して、
「無暗に酒を飲まさうとして、思はくがあるとお
つしやつたが、さあ、何ういふ思はくか、それ聞か
せて。」と詰寄れり。

老人は澄し込み、

「なにも、高價酒を酔狂に振舞ふ譯はない。一寸酒汐で味をつける目算さな。」と眞顔にて謂ふ。

「おや。酒汐で味をつける。悴や、何のことだらうの。」

「へい、奇代なことをおつしやいますが、父様、何でございますえ。」

母子は老人を瞻りぬ。

「何をつて、嫁をよ。」

「えゝ！」

「彼奴、むつちりして何様にか旨からう。」

と老人は早舌なめずり。

「あゝ、お情ない父様、左様なことをおつしやるのは果然御病氣の故でございます。何卒とつくりお心を落着なすつて、お薬を召上つて下さいまし。此間から些少宛御様子が變でございますので、種々薬を差上げましても、更にお用ゐりませんが、其ではお悪うございます、え、もし父様。」と愁然たり。老人は無頓着、

「薬も品に因つちやあ飲まんでも無いが、葛根湯やなんか元伯の調合ぢやあ見る氣も無えの。」

「ではまあ何様薬が可いのだえ。」
 「老年の薬には、蝦蟆の精血が一番可いて。」
 「え、なに、蝦蟆の精血！」と母子は吃驚、
 「むゝ蝦蟆の精血に限る。悴や、早速飲ませてくれ。」

若主人は困じ果て、

「御無理ばかりおつしやります。今時何處に蝦

蟻の血が……いえさ、あつたにした處で、人の飲むものでございますか。」

「知れたことだ。人間の飲む様な不味物が飲めるかい。」

「あれですもの、母様。」

「おい喃。」と母子は顔を見合せぬ。

「おい、早速ながら蝦蟇の精血に有附きたいな。」

若主人は益々窮し、

「此節蝦蟇が居りますものか。餘り御無理でございます。」

「だからよ、強て薬を飲ませるとは謂はん。嫁を呉れりや其で可いのだ。」

「嫁御は生きて居りますわね。」

老人は冷笑ひ、

「死んではまるつきり味が變る。何がなし、活きてる奴を引裂いて、手足をばら／＼にする。可いか、腎の肉は刺身にして、心臓の血を打懸ける。あとは啖物よ。骨は叩にしてもり／＼とお茶請だ。處で生肝が甘煮になる。臍腑はぶつ／＼切にして脳味噌で和る奴さ。こゝに尤も己が目を懸けるのは彼のはら

んで居る嬰兒で、こいつ附焼にして天窓から嘯む。
まあ何んなにか旨いだらう。」
と言懸けて涎を流しぬ。

若主人は蒼くなれり。老婆は聲を震はせて、
「えゝ、もう何の因果で此様恐しいことを聞くこ
とだ。ほんに／＼蟲も殺さぬ佛の様な人だつけ
が……」

皆まで謂はせずせゝら笑ひ、
「汚はしい、嘘にも佛なんていつてくれめえ。癩
に障る。」
と嘯けり。

老婆は胸を据ゑて身を擦寄せ、
「要らざる長生をするから起つて、聞くまいこと
も聞いたり、見まいことも見たりします。私はもう
此世に愛想が盡きた。あの可愛い嫁殿に指一本でも
指されようか。ちやつとお食りなさい、嫁のかはり
に私を食はつしやれ。さあ、喰附け、覺悟した！」

「なに、私を食へだ、壓の強い。脂肪氣も何にもない、まるで金魚麩の様なものだ。薄汚え。」
かつぶと痰を吐懸くる、狼籍既に人列の外にあり。

「餘りだ／＼、父上餘りだ。とても本氣の沙汰ではあるまい。店の物が使に行けば寒からうといつては御自分の炬燵にあたらせてお遣りなさる。老人が蚤く起きては若い者が寐からうと無理に御寝なつて在らつしやる、といった様な父上が、誰の怨、何の罰で、淺ましい。折角御丹精遊ばした内の暖簾に庇が附く。貴父の恥と思ひますから番頭始め店の者親類一家不殘に秘して居れば相談もならず。一體節分の晩お歸りなされてから急にをかしくなんなすつたは、大方道でひよんなことがあつたのもあらうかと、推量をするばかり。お陪従をさした小僧が居れば、些少はあたりも就かうと思へど、彼も其ツきり行方知れず、何を何うして可いのやら、殆ど途方に暮れまする。」父への意見、母への繰言、己が愚癡さへ取交せて若主人は呟きつ。唯見れば老人は足踏申し仰様に踏反りて、鼾聲雷の如くなり。若主人は歎息して、

「おつかさん
母様。」

と其傍に差俯向ける袖を曳く。

「おいよ。」と老婆は振返る。

「おつかさん
母様。」

「せがれ
悴や。」

「弱つたことになりましたな。」

「何とか嫁とも相談して。」

「方法を着けねばなりませんまい。」

眼を覺さしては面倒と、ぬき足して忍び出で、嫁
の居室に到り見れば、衣類調度を取散らして、おや
／＼おや！ 嫁は泣く／＼落支度。

若主人は慌て、嫁の袂を控へ、

「これ／＼お花お前こりや何處へ行く。」とお
ろ／＼聲なり。嫁は花の紅の襦袢の袖を噛切めなが
ら、

「何處へも行きはいたしません。お父様のお望な
ら私や殺されても可いけれど、肚の兒まで恐しい附
焼にされては可哀相でございますから、濟みませぬ
が暫時實家へ参ります。何卒堪忍して下さいまし。
其かはり身二つになりますれば、直ぐ歸つて来て、
鱈にでも刺身にでもなりませうと、覺悟して居りま
する。」とわつとばかりに泣出せり。

若主人は貫泣して、

「おゝ、それでは残らず聞いて居たか。」

「あい、心許なさに竊聽して私や酒汐を飲まされ
たことも、手足をばら／＼にされることも、もう、
疾に存じて居りますよ。」

「やれ勿體ない。爺様の謂ふこと肯かうなどと、虚にも謂つておくれでは、却つて罰があたります。早くお里へ遁げておくれ。お前も定めし愛想を盡して、また歸つて来てはくれまいけれど、樂にして居る初孫の顔だけは、これぢや、拝みます。そつと見せて下されや。」と手を打合せて老婆は泣く。若主人は遮りて、

「しかし母様。今嫁が歸りますと、里をはじめ怪んで何故といふ疑ひを起しませう。すれば秘すにも秘されず、明けて謂はねばなりませぬ。狂氣も多いけれど、何處に人間を食はうといふ恐しいのがありません。私は何うしても父様の恥を人に知らしたうございませぬ。これお花、まさかお前を生きながら肉俎の上へ載せる様なこともせまいから、我慢して行かずに居て呉れ。私が一生の頼ぢやほどに、肯分けてくれまいか。」と熱き涙を灑ぎける。嫁は身もよもあらぬ思、屹と心を定めたり。

「唯、宜しうございます。貴下さへ御承知なら、何の生命を惜みませう。里へ參ると申したのも、肚

の兒が大切に、思うたゆゑ、私の身は萬が一ぶつ／＼切になりましても、ちつとも厭はいたしませぬ。」「
「いと潔く言放ちぬ。」

「おゝ、よくいつてくれたぞ。」と姑は嫁に絶れり。

「これで一方は片附いたが、さて困るのは父様の容體ぢや。」

息子は思案の腕拱く。

「もし、貴下。何とかしやうはございませぬか。」

「さればさなう。」

と三人が齊しく首をうなだれて、暫時言途絶えた時しも深と夜の更けて、丑三の鐘幽に聞え、寒さ、寂さ、身に染みて、鬼氣陰々と人に迫るに、一座思はず慄然とする、天井の方にてくす／＼笑。婀呀と見れば人も無く、唯聲ばかり聞えつゝ、

「はゝゝゝ、へい、旦那今晚は。御新姐様、お寒うござい。はゝゝゝ、御隠居様、御機嫌宜しうツ。」

「あれえ！」

「おや！」

嫁も老婆も蒼くなりぬ。

「誰だ。」

「へい、御存じの長松で。」

「なに、長松だ。をかした奴だな、何處に居る／＼？」

若主人はあたりをきよる／＼。

「旦那。此處に居ますよ。此處に／＼、は／＼／＼」

「小僧は破風口より顔を出して、」

。

小僧は三人を驚かせり。

三人は實に驚きたり。驚きたる三人の傍へ小僧は身輕に翻然と下りて、主人の前に畏まりぬ。

「へい、多日御不沙汰いたしました。」

「御不沙汰も無いものだ。汝一體今まで何處

を………」

若主人の語末だ半ばならざるに小僧は急に遮りたり。

「否、旦那。 (今まで何處を) なんて私を叱

つていらつしやる隙はありませんよ。へい、驚いちやあ不可せん。」

これより小僧は豫てのお饒舌に懸けたる疾口に、お汁粉以來の怪談をさら／＼と物語り、

「でね、旦那私も思はず噴出しました。奴が天窓を抱へて悄氣返つた其風采ツちやあないんですもの。

へい、角の無い鬼は初めて見ましたね。處が笑つたのを聞いたと見えて、（や、人間の聲がする）と、青鬼が飛んで来て、私を掴出します。一方ぢや雌の鬼が、（角は何處へ何うして来た）つて雄の方を小突廻すと、其奴がいふにやあ、（つい節分の豆に面くらつて、遁出す機會に、此、小僧に抵觸る拍子に落ことしたのだ）と私を指さして、（これの主人と見える老年に奪られた、）といひました。もし、旦那、御隠居様は鬼の角をお拾ひなすつたといふのですが、そんなものを持つていらつしやいますか。へい、へい、成程はあ、邪慳非道なことを。へい、いやそりや屹と其故でせう。ですもの、角を落した鬼の方は、無暗に憐つぽくなつてまさあ。處で鬼等が寄つて、懸つて、（そいつは異事だ、早く取返さねば、不可）つてせつゝいてね、たうとう赤鬼を納得さして、其處で私を案内者にして、暗雲で御家まで駈けて來ました。すると例の赤鬼が、（こんな態で不意に推込んだや、家内の者が吃驚して目でもまはすと氣の毒だつて、）何處までも優しいね。他の奴等が、（何、構ふものか）といふのを無理に控へさして、私を先觸に

一寸御案内に寄越しました。早く何處かへお遁げなさい。今にも飛込んで参りませ。私は先づ御免蒙りましてお先へ遁げます。また蛇の雷干なんて、亂暴なものを食されると大變だ。誰方もお早く。」
と謂ひもあへず、尻引ニ遁出したり。

三人はなほ半信半疑の間に迷ひて、遁げむともせで猶豫ふ内、腥腥}風一陣破風口入るよと見えし、鳩槃茶は牛頭馬頭の鬼を従へて、俄に姿を顯せり。

これにぞ婀娜と驚きて、轉けつ、まるびつ、遁げんとする、最騒がしき物音に、奥なる老人は眼を覺し、

「ばた／＼する！ ばた／＼する！！ ばた／＼する！！ おのれ！ 嫁を遁がすんだな。」

謂ふより疾く躍り出たり。母子は既に遁たれども、身重なる嫁は走ること意に任せず、氣のみあせりて這擦廻るを、老人は目疾に見着け、矢庭に鬚髪を無手と掴みて、宙に釣り下げ突立つ處を、鬼どもは早押取巻き、

「やい老耄、鳩槃荼の角を返せ。」

「否だといふが最後だぞ。」

鐵棒を突立て、牛頭と馬頭とが呼はりたり。老人は怯氣ともせず、冷笑ひて嫁を指さし、

「己あこれの舅なら、汝等は千疋來た處でたかど小姑の分際だ。なに猪口才な、一旦手に入る寶物、舍利になつても渡すものか。ならば腕盡で取つて見ろ。」

「問答無益だ！」

「遣附ける。」

鐵棒取伸べ身構ふれば、老人は騒げる色なく、徐々に懷中を搔探り、件の寶を取出して、

「金の角だぞ。」

牛頭馬頭は逡巡せり。蓋し金の角は渠等に對して、偉なる位階と、勢力とを保てばなり。

「金の角だぞ。」
「老人は再び謂へり。」

渠等は一同に平伏せり。

老人は得意になりつ。繰返してまた叫びぬ。

「金の角だそ。やい！ 頭が高え。」

彼等は頓首再拜せり。これを見て老人はにこやかに、

「うゝ、可し、可し、汝達も折角娑婆へ来たものだ、むざ／＼とも戻されまい、此奴を少し宛筆つて分けて遣らう。」

と捕へたる嫁お花の正體無きを差示しぬ。

「へい、難有う存じます。」

「見たばかりでも唾が走る。御馳走様でござりま

す。」

牛頭と馬頭とは恐悦す。

鳩槃茶は悄然と座の片隅にゝみしが、今や老人の嫁を掴みて、足より裂かむとするを見るより、あわてゝこれを押留めたり。

「飛んだことをなされます。罪も無いお嫁御を滅相な、お土産なんぞ要ますものか。」

「でも己等が欲いんだい。」
と傍より牛頭は叫べり。

鳩槃茶は聲に怒を帯びて、

「控へろ！」

と一喝せしが、金の角を持たざれば、少しも渠等を威するを得ざりき。

馬頭は輕侮の色を顯し、

「お前は今ぢや何にもならない。御隠居様が頼もしいや。」

「あゝ！是非も無い。」
鳩槃茶は悄然たり。

老人は委細構はず、あはや犠牲を屠らむとする時、
後馳なる雌鬼毘舍闍は雲を踏みて忽然と顯れつ。

「汝！老耄、良人に角を返さぬか。阿修羅王より借請けた此劍が返せとあるぞ。」

玉散る劍を額に翳し、星眼鋭くはつたと睨めば、
さすが魔王の威に恐れて、老人は打戦き、立ちも得

せぜ膝行して、角を鳩槃茶に返しける。鳩槃茶は恭しく其角を三度戴き、一度天窓に冠むれば、こゝに再び備はりたる、夜叉の形相凄まじき鳩槃茶俄に氣色を變へ、銀の髻を蠹かし、金の眼を怒らして、朱盆の如き口を開き、

「無禮至極の人非人、餌食にして腹癒せうにも、木葉の様な汝の肉は、口へ入れるも氣味が悪い。其かはりに嫁を食ふぞ！」と焰の如き舌を吐く。

「やれ悲や。」と老人は身を投出して嫁を庇ひぬ。

見よ、老人が其本性に歸着せしは、鬼の角を棄てしに因るを。こゝに筆を擱きて、漫に亂神を説けるを謝す。幼年諸子、諸子また讀過一遍の後は、此鬼の角を匣底に棄て、更に机上の經典を播け。

【完】